



由
哲
文
集

中村俊定文庫

文庫 18

906



由誓文藁



無意袋序

彼乃和尙り其教ぬ法縁客も亦良き二物なり一ともかへも
なほそや 徒承まを人の 禱しこいけらるるに 既備しとらへり 常
家のぬきぬき之状をいとのまのし 出せらるひ ちきく川の 波乃
轉りぬり 園あり 堂縁をも 智恵縁をあるし 月夜を撰
とちやあゝゝ 隨當きくに せしむるを とし 禱 あまそ 教の 白紙を
派せしむり 印その 友友をとも 善き 縁縁をいとの ぬよせむし 善
ひとの 冊子をとも 善き 縁縁をいとの ぬよせむし 善
をぬけし 縁をとも 善き 縁縁をいとの ぬよせむし 善
中一ふありし 冊子をとも 善き 縁縁をいとの ぬよせむし 善

ま〜と此中〜のそなたをききし佛士の法このたが〜ふち〜ひさ
あはれ〜のそなたは踊入たすひとそなたの〜ま〜法ある〜とのち
地當ら〜減なり

文化庚子初冬

再興木葉駒序

鬼つら〜のそなたは〜をききし佛士の法このたが〜ふち〜ひさ
あはれ〜のそなたは踊入たすひとそなたの〜ま〜法ある〜とのち
地當ら〜減なり

むをば〜のそなたは〜をききし佛士の法このたが〜ふち〜ひさ
あはれ〜のそなたは踊入たすひとそなたの〜ま〜法ある〜とのち
地當ら〜減なり

時志文化七を来三月之五日

多羅葉集序

むをば〜のそなたは〜をききし佛士の法このたが〜ふち〜ひさ
あはれ〜のそなたは踊入たすひとそなたの〜ま〜法ある〜とのち
地當ら〜減なり

尾をさし入るをさうりさしは 在物なると人のかきめと抑
その勢を首人の勢がたつて成争ひしよるもおぼろのそ紀
こそなり我友素院堂とて狂句浅挿の能ありと云ふあや
唐をぬお第一に狂句もこのと悟りて聲はいつともあはれ
比への比あつ先なほひろあきうをさうりてとて此は浮世の仇
と浅のひらりて高乃揚かかをさしむ徳とすまてとてたれら
をさしよるあきうとてさしひまをさう揚よわけりあてく
らたてさしよるさしよるさしよるさしよるさしよるさしよる
名をさる程なるといふのたてしよる佛乃さしよるあきう
よりとて狂句のさしよるさしよる

文政元成実年

推栄集跋

梅やまのさきあんの画りかきかきあんの目よあて
おぼろの勢を首人の勢がたつて成争ひしよるもおぼろのそ紀
こそなり我友素院堂とて狂句浅挿の能ありと云ふあや
唐をぬお第一に狂句もこのと悟りて聲はいつともあはれ
比への比あつ先なほひろあきうをさうりてとて此は浮世の仇
と浅のひらりて高乃揚かかをさしむ徳とすまてとてたれら
をさしよるあきうとてさしひまをさう揚よわけりあてく
らたてさしよるさしよるさしよるさしよるさしよるさしよる
名をさる程なるといふのたてしよる佛乃さしよるあきう
よりとて狂句のさしよるさしよる

龍江の桂丸は水らの移り成ありては善と選りしや。そのはくの
程の跡をちたの殿乃のよきとせむと秋のそ病の目とあふて一
すややうにひのくはつてあはれしや。押のれをきせしや
ほむきせしやを桂柴野の野あしや。外へくはてく情をあら
きんとせしや。成るまゝ一にせしや

文政三年一月

雁と信ちめ序

わがしよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成くあせ
ほひは何れをよのしとせしや。井乃なまあを其のよ人のよ
めきつてくをおれりて推しあし。そ何くあし押のしとせ
しや。しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成くあせ

鶴結録首と名あたらししもの結成の願ふ押のれをたせんと
あむたをいしよをせしや。風神のくし志乃海のくまはつ成
しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成くあせ
表しあめを相乃まをきよのしとせしや。しよのまを去れを争ひ
なりしよをせしや。しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成
結成ををあらし。しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成
しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成くあせ

文政七甲申春二月

連志記序

俳諧の道を極する人よたせしや。誰とくは中くよの結成
しよのまを去れを争ひ月を成りてくはるは結成くあせ

はのらふ巾―小東海道新花雪のゆきうした杖をむねぬ大井丈
 純のありせの徳もいふふいふにや―又中山道めいひもまた
 その難さのむねは向井和田の並行路はたやういふのこゝろに
 おそかきぬれたまひき―山道を道なりたれ方なれかあはれ
 をより―とせしきよむをいふははの約代景志のせき世の閑を
 さとるをきききしに地をいふぬ人を座するわつたぬ座にあり友人
 連志よくこの徳を志せし―のち振と徳能をむく川―きりり
 おのむり―よるも是をも座しとむ

心乃 箴

和のゆより始む誰も何人ききか大師ののこまの徳をむくやと
 さも徳をいふのむくすぬはあへ入る人乃あやうきと―又

徳を川澤の心をききあふ―徳け津乃玉の徳波のゆゑる人
 ありふし新しきまかひのあらわらう徳をむくや―あふも入る人
 少徳をいふまよく―徳をいふ本多徳も同じまの徳新の徳も身に
 あり―も徳をいふまよひのゆゑあふもききか―ゆゑあはれな
 みとむ時を何中―をうひのくまはあふ―物をは―はは秋の徳は徳
 をのむせまよふと徳をいふは乃あまのいふま何―か―徳を
 徳は―あまの徳のら自の徳は徳をいふけ徳の徳乃波をいふ
 ありかぬ徳をいふまよひのゆゑあふもききか―あふもあはれな
 くも乾坤のむく―やるまはれあふ―徳をいふは―あふもあはれな
 徳もあはれな―あふもあはれな―あふもあはれな―あふもあはれな
 飯丸のゆよたまき―徳は徳は徳は徳は徳は―あふもあはれな
 同志のあはれな人の身あはれな―あはれな―あはれな―あはれな

昔しきよいづりて火を移ち雲霞のをぬけりーらしをかまへ
んをそとまふののれをすきしーあまの記ありー何れにこれ
年の俳諧をあはみそまのゆたのゆたーそのまきこを
あしをいゝるゝん世よの粗句を評しー娘ははらあそびを
るまきくぬりて今よりたへをまひぬらぬらぬをそほまき
帯んとほひまをとり心の歳をのまきこをいづりて

風雅より遊ふ力能をりーさきこをいづりて松の地りん井をま
く素白乃地のそらせよ志の清くことそほくかち粟のいひら
ちの秋御所ーい極のまらうひをいへ地ふ標とほらうた
はらひとの系乃路をいづりてぬけぬぬのまらぬ標葉のまら

茶をこのあ何のめ儘まのかをなる月より海老の獨りーま
辭に發すまらう白むとのほは極の雲をこまらぬ竹岩の
まきまらう流ーかいつけ地く及ぬと竹のま代りけそま
たのむこをあらまらぬれとそま年取物を新ーそ人の粗句
まらぬをいづりてまらぬのまらぬをいづりてまらぬ

卯乃をを電をの地らるに花らめあまらーま天の極を
ーちたりむれまらうんうまねらうあまらうまらまら
とひらまらまのほーまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

手にとりて半一紙としそ紙を地ひとけぬあまの都り一紙
 水鏡すくすくゆふまきくま風よ山田吉家山子のたふくをまの
 阿ふあふらふ中しくをり一紙ふもあまをのむをたふ乃
 梅のたふびりふあふは思ふまを志る一紙序也

藁盒子跋

舟屋あまを紙紙乃種を小紙のあまをり一紙紙たる也
 そ紙をへを書ふ多紙桐田中しく法あまをり一紙その二まのそよこ
 あまゆぬきこりぬ紙をやうそまあのをまよ種よ阿り種を
 海川の半紙石易の呪稲窓をむまをり紙紙を紙へ法ひよ兼筆
 をへるあまをり母の人をんどのぬき一紙兼紙一紙あまあふ乃
 種よ阿ふ人なまあふむ紙一紙思ふまをりあま人のそはや一紙

あまあまをり一紙あまの紙あまの紙一紙あまをり一紙あまをり一紙
 ぬきこり種あまをりむまの紙紙紙のあまあふらたるを兼筆
 たふぬきあまをり法の紙兼紙一紙あまをり一紙あまをり一紙
 あまをり種あまのむくうまよ一紙紙紙種あまをり世国のあ
 けり一紙紙一紙あまの紙り紙あまをり兼筆紙紙の一紙兼筆
 阿ふあまをり兼筆一紙あまをり一紙あまをり一紙あまをり一紙
 兼筆の紙乃あまをり一紙あまをり一紙

天保三年十一月

りあまをり一紙あまをり一紙あまの紙あまをり一紙あまをり一紙
 兼筆の紙兼筆あまをり一紙あまをり一紙あまをり一紙あまをり一紙
 たふぬき兼筆あまをり一紙あまをり一紙あまをり一紙あまをり一紙

かりきとらる一みつよれ句いひおんくたきまもあ新し
 道く無きなり一くゆのこすあやうにからるる名をたぬふまを
 としきりゆをむくまゆあら寸鐵を切ひをとりてとをたれあ氣乃
 何れも成のうれはあて起しとてふいり清涼基のそまあ中
 射しと輝きそ意をやのそ精舎よとあおるのゆきまかてしけ
 ちや

秋の山果をいひてさるるを以

十洲一覽賦

山を何れぬ道も津も又あら人のきこくぬれはまきとあつ小島一
 く中ゆえりいひゆをさる松栢もあまのりけし書つゝれたるは
 醜く耳も白くはし一そはまへりあふく名山勝地をなす

りあは一そ乃抄きとあつまのきく筆を成らうれたるよその後わ
 のそれをいひゆをさる松栢もあまのりけし書つゝれたるは
 のみき抄きとあつまのきく筆を成らうれたるよその後わ
 鳥居川乃きとあつた精舎のり松葉舟とあつ一之宮の邊一よき
 湖の山よりあき嶮岨をうけゆをさる筆を成らうれたるよその後わ
 りあは一そ乃抄きとあつまのきく筆を成らうれたるよその後わ
 田基黄磔二世慧極和尚の筆ありていひりてあつり東守りそよ
 本堂密殿部をとりけ方丈僧房をとりあつりそあつらるり
 石間乃あつる筆を成らうれたるよその後わ
 筆を成らうれたるよその後わ
 鐘樓寶藏をとりあつる筆を成らうれたるよその後わ
 たりあつる筆を成らうれたるよその後わ

大勅を新乃彌を賜りて新田義貞上元より誓を授け
所せしを賜りて之を無火の命に授けおんしく授けし一
賜多和九条輝房の賜地ありし一其の命の千百年に於て是
誓ありし一かゝる命一とて中東鑑にのちたり乃真慈悲
有法なる書書未去申出現のり此物ありしと云ふ一鑑に
年代中其詳なりしを誓書に記す此物ありしと云ふ一鑑に
思ふ命もたれし一かゝる命を對しし一とて此命を授けし
うしあらしむる命を回賜し人ありしと云ふ此物ありしと云ふ一
あるを記ししと云ふ一也

享保五年九月

いんげんをいんげんといふに取らば此物ありしと云ふ一鑑に

基石珠勅や此物ありしと云ふ一鑑に
何れに據らるるものかその道なき一鑑に
といひ置るものありしと云ふ一鑑に
あつたてて人の得失をあらわむし其命を生かすに業ありし
此命ありしと云ふ一鑑に
好むものありしと云ふ一鑑に
何れに據らるるものかその道なき一鑑に
いんげんをいんげんといふに取らば此物ありしと云ふ一鑑に
河をすれり一鑑に
多きものありしと云ふ一鑑に
一人情を推ししと云ふ一鑑に

河を志す——多岐のこゝ美——きよきりのまゝおそく河を流
たると心にあそぶあつちの地を流すを成るなり——まろくむろく人
中の人の中を甲乙を流すを人の中を流す——よおきくまは
たは流す乃昔の流す風を流すたはりゆるたはりゆるを流す
流すまろくく河を流すを流すなりおそくくを流す——と獨りまろくむろく
まろくく——古より詩歌連綿乃集とくを句のよ——河を
撰者のつらうを流すを撰者の流す業なり——あつちと故今を流す
風友社郷あつち流す乃流す句成れ上はなつちくを流す——
昔く流す乃まろくを流す指ひ流す乃一集とく——名流能二流を流すは是
おのつちを流すを流す——推して流すなり古の流すこと流すて序成
れむく流すを流すのよ流すのよ流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す
昔を流すくめを流すく流すを流すくかむを流すを流すを流す

或人唐詩子を観お——そきくく流すの流すかよ流す乃流
河を流すのよ流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す
あつち流す火のおろくを流すを流す——流すけらるるを流すを流すを流す
世を流す乃を流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す
日流す乃を流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す

芭蕉庵よ六種乃什物あり其一ふ巻居二大瓶三小瓶其四
松笠五ふ巻の画其六茶碗七折扇八他物なり——素布を流す人の
流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す
あつち——河を流すを流すを流すを流すを流すを流すを流すを流す

親類より借し去るべきものありけりとてとてありて追稿とて
 新中又あり也俳諧乃みせよとのめきとて其の
 石生喜林直叙ありて中より多くありて其の
 切のそらもたれを以て孝子花おのれ遺章一城より久人
 因何のくくのりてと書かざる一集より七回
 の新のりせり披瀝ありて極きやのて回響の佳とて
 よれとてよれとてよれとてよれとてよれとてよれとて
 帝とてよれとてよれとてよれとてよれとてよれとて
 四友のよれとてよれとてよれとてよれとてよれとて

俳諧會日定式

- 一 去る席に於て修りて樹下石上を思ひやう合ハテ後を
補ふ事とてよれとてよれとてよれとてよれとてよれとて
のりとて
 - 一 當日乃歌を先り句集に連句能次自中と俳諧小
作歌をよれとてよれとて
 - 一 正よと柴申の下刻に生るる道系歌人よと歌歌なく
返出をよれとて
 - 一 俳諧乃ふ世話能長徳をよれとて
 - 一 叔名と蘭の上刻よりと書を臨み深更より中より家内乃
奴婢を労せらるるありとて
- 右五ヶ條を編めよとてよれとて

慶應元乙丑年九月

由誓門人

撰者

星野氏	花	外
山崎氏	杉	曉
矢澤氏	抱	叔
鈴木氏	完	鷗
細川氏	波	鷗

羽書

却却北去のそりや 梅柳 芥 舎
 乙智や 扇そ 波あき みる けり 鷗 池
 山 岩や 幾り 初 きの の 都り 津 倉
 袖のせむ 二 耐 子 せむ や 過り 花 九 起
 敷 ぞ ぞ 床 乃 ちや 木 の 葉 の 乳 波 同
 と 能 かの こと ちや 四 房 乃 傍 ちや 公 成
 ちや ちや 柳 乃 結 ちや ちや ちや 山
 三 井 葉 津 ちや ちや けり ちや 月 ちや 前

名音や音所乃音以之起 昂
 早少自下音のぬ葉に白ひりれ 杜
 名月や音をいふ事なる所のを 憺
 音をよや代てとらばは音とを 素
 みーの歌乃り幾ちのー 枕 梅
 舟渡をさるぬ色や曼珠沙華 羽 河
 渡ゆり道をかたれそとる 豊 経
 揃く砂乃戸よとけ 万也との秋 士 前
 何の鱧や音ののりよき反加城 嵐 午
 誰と音結つて音のや 相ひ音 蓮 空

高り音結果させ 離 衆 枯 山
 木より音を帯て渡り 春の月 月 杓
 沿端へ音をさるる 現 樹 乃 月 冬 南
 さる音を山の白ひり音 然 子 之 五 渡
 何のーと音を音をいふ所のを 一 砥
 掃て又音をー 之 音 音 衆 云 沿
 初音や音乃音りて 音 音 の 味 翠 羽
 初のけと音り音より 渡り 花 葉 升
 音を音に秋のー 秋 乃 之 三 四
 さる(と音を音を) 音 の 音 飛 年

才川也や海より中けし人きき 月夕
 移りし心静かきよ老よりりり 見お
 す河もさるるく河もさるるのさく 如白
 目もさるるく河もさるるのさく 破江
 流りし心静かきよ老よりりり 秋之
 はつ秋や竹もさるるく河もさるる 梅且
 志す流河もさるるく河もさるる 尋香
 枯草や錦とさるるく河もさるる 華光
 降りし心静かきよ老よりりり 照堂
 初月や昔もさるるく河もさるる 佳谷

猿梅や踏つけく河もさるる 只青
 月もさるるく河もさるる 甘茶
 地もさるるく河もさるる 稲市
 志す流河もさるるく河もさるる 照平
 押へさるるく河もさるる 右采
 耳もさるるく河もさるる 未嘸
 明もさるるく河もさるる 官夕
 源もさるるく河もさるる 呂風
 昔もさるるく河もさるる 永年
 さるるく河もさるる 百天

ぬくく香りしつらり香の梅 甘志
備りけけきらるる四極き 菊裁
あまう相乃道あるや山さくく 卓節

手向おろくばし書

葉をくく船頭見そく暇り一後 為山
あはしくと柳みと切るそく秋乃霞 ト早
あはるや香くゆくそくひりあき きく雄
ほのりくあま思りや 紅葉の秋面そく 菊南
香りく自の葉や 菊の暇まある 菊山丸

けく思そ けりくあまきく水月くけ 如操
あまうくかきく 秋をけりく理 篤之
新書表の香とあまきくあまきけり 五休
葉を思そく菊の香くあまきく 白起
菊飾乃秋末飯や 手向あまぬ 春湖
神をくく一舟少く河野子香のけ 拙人 拙誠
くくあまきくあまきくあまきく 吉太
我よりとあまきくあまきくあまきく 樹石
あまきくあまきくあまきくあまきく 瓦村

